「訪中での出会いからできた新しい夢」
3-A 愛知県立大学　天野未悠

私は訪中団の団員として訪中し、中国の歴史的建造物の参観や中国学生との交流、団員との出会いを通して、自分の将来への良い刺激をもらうことができたと考えています。具体的に得た刺激としては、「将来中国または台湾で仕事をしたい」という夢ができたことです。私は大学で中国学科に所属しており、中国語や中国の歴史、文化、政治、経済などについて学んでいます。私が大学受験の際中国専攻を選択したきっかけは、高校一年生の時に上海へ旅行に行った経験が挙げられます。それは私にとって初めての海外旅行だったため、上海の規模感に圧倒されるとともに、言葉が通じないストレスを生まれて初めて体感しました。そして負けず嫌いな私は「次は中国語をマスターしてから中国に行きたい！」と思い、進路選択の際中国専攻を選びました。

今回はそれ以来二度目の訪中でした。今回の訪中では、兵馬俑など授業で学んだ歴史的建造物を直接見ることができ、感慨深い気持ちになりました。また留学を含め 5 年間勉強してきた中国語を使い、現地の人と中国語で会話をしたり、班員の子から「この中国語はどういう意味？あの人はなんで言ったの？」と質問された時に答えることができたりなど、自分の成長を感じました。自分が進路選択をした際に持った「中国語をマスターしてから再び中国に行きたい」という夢を叶えることができたと思います。7 年越しに自分の夢を叶えられて、非常に大きな達成感を感じました。

そして今回の訪中を通して私が新たに持った夢は、冒頭にも述べた通り「将来中国または台湾で仕事をしたい」というものです。私はキャリアプラン設計の難しさから、就職活動の際、自分の専攻である中国語を生かす職に就かなくても良いと考えていました。面接で聞かれた時も、旅行や習い事など趣味の範囲で中国語をこれからも続けていきたいと答えていました。しかし本当は心の中でずっと中国語や中国に触れていたいと考えており、そんな自分を正当化していたと思います。そんな中、今回の訪中で様々なバックグラウンドや興味の源流を持つ団員と出会い、私のこの考えは変わりました。団員の中には、英語圏やヨーロッパ、東南アジアへ留学に行ったことがある子がたくさんいました。中には海外で働いたことがある子、災害支援のボランティアをしたことがある子など、留学を超えた経験をしたことがある子もいました。海外や言語学習に興味がある私にとって、その方面で幅広い経験を持つ団員の子達から話を聞き、非常に大きな刺激を得ることができました。そして訪中から帰国し、自分が将来本当にやりたいことは何か、自分はどんな時にやりがいを感じるのかと考えてみた結果、「自分が好きである言語を通して、できなかったことをできるようにすること」だと結論が出ました。一度は諦めかけた海外駐在という夢。私の中国語力はまだまだビジネスに通用するものではありません。また海外で働くというのは、留学とは違った難しさや危険が伴うでしょう。しかしそれらを乗り越えた時、私はどうなれるのだろう、どう思うのだろう。もっと成長した自分を見てみたいと感じ、新しい夢を叶えたいと思います。今は

まだ貯金もないし、親を頼ることができないので、すぐに海外で働くことは難しいですが、社会人になってお金を貯めたら、絶対に叶えたいと思います。それまでもっと中国語を勉強し、中華圏への知識を深め、夢を叶える準備をしていきたいです。

やりたいことを正当化して我慢するという結論を取ろうとしていた自分にとって、今回の訪中での出会いは、非常に重要で大きなものでした。マンネリ化した当たり前の日常を色鮮やかにしてくれました。団長も仰っていた「出会いで君はできる、出会いで君は変わる」という言葉がありますが、私も今回の出会いを大切に、そしてその出会いによって変わった自分を大切にしていきたいと思います。

末筆ではございますが、2024 日中友好大学生訪中団に関わっていただいた全ての皆様に、心から感謝申し上げます。今後も日中友好関係の一端を担うという意識を持ち、スピーチ大会など様々なイベントに参加させていただきたいと思います。

「関心を持つとは」
3-A 東京大学 木村舞穂子

今回の訪中で私は、中国について、そしてより広い視点で、本当の交流とは何かを学びました。

まず、中国について感じたことを述べます。

私がこの訪中団に興味を持ったきっかけは、学生のうちに中国の力強さを見ておきたいと思ったためです。その点で言うと、この目的は、十分に達成されたと言えます。なぜなら、北京、西安、上海の巨大 3 都市を訪れ、それぞれに違った街の発展を見ることができたためです。北京の道は基本 4 車線で、さらにバイクの道、歩道が整備されていました。碁盤の目状の交通網で、日本より安全な歩行、走行が可能だろうと感じました。また、全ての建物が今まで私が見てきたものの数倍あり、中国の強さとともに、いわゆる大国とは何かを知ることができました。西安は、空港から 1 時間以上車に乗っても続くビル群に驚き、また若干の恐怖も感じました。一方、歴史のある場所では紀元前の文化を見ることができ、ここでも中国の力強さの理由を知りました。上海は、まだ見足りないので、また来たいと思います。また、Google Map で全ての中国の都市を見ましたが、どの都市もそれぞれに栄えており、各都市が別の国のような文化があるように思いました。そういう点で次は、中国の力強さではなくて、文化を楽しみに各都市を回りたいという思いが強いです。

次に本当の交流とはという点について述べます。

留学経験のない私は、グローバルに活躍するためには、ただコミュニケーションが取れれば良いと思っていました。英語なら英語で、中国の方が日本語を話せるなら日本語で良いと思っていました。もちろんその国の言葉を話せた方が良いという認識は持っていたのですが、体感する経験が今までなかったということです。

しかし、今回の訪中で、西安外国語大学の副学長の挨拶を聞いた時、いくら後ろの画面に翻訳が出ていても、全く受け入れられている感じがしなかったことに衝撃を受けました。上辺だけに聞こえてしまったのです。北京外国語大学で、日本語で挨拶いただいた際、何気なく聞いていたのですが、それは今思えば、ただ話せるから話したのではなく、我々に敬意を表してくださっていたと感じます。

例えば相手に好かれようと思った時、私たちはまず相手のことを知ろうとします。逆にどこか下に見ているような時、そもそも知ろうとせず、自分たちのフィールドで進めます。愛の反対は無関心だ、と言いますが、私は無意識にこの状態で、中国の方とコミュニケーションを取りたいと言いつつ、本当に理解しよう、自分から近づこうとする努力をしていませんでした。

現地の言葉で話すことの大変さを体感してみたい、そして、現地の方にどのように伝わるか確認してみたいと思い、私は中国語の発表原稿を作りました。挨拶の文章を翻訳し、西安外国語大学の学生に文法を訂正してもらい、発音を録音させてもらい、そして一晩中、西安

から上海への移動中もぶつぶつ言い続け、やっと形になる、くらいやはり労力を必要としました。

この経験から、ガイドとしてついてくれた西安外国語大学の学生が、どれほど労力をかけてくれたか分かりましたし、また、自分の成果を教えてくれた学生に披露してみたところ、一層熱心に教えてくれて、また一気に関係が縮まったと感じました。街中や空港でも、「謝謝」というと必ず笑顔や、返事を返してくれました。

私は、対等なコミュニケーションというと、上の立場の人へ自分の意見を述べることばかりを考えてきましたが、そこではなく、敬意を持ち、逆に自分が虐げられたと感じる時は、厭わず意見したいと思いました。

最後に、今回の訪中に関わってくださった全ての方々、学生のみなさま、現地の皆 様、今後の生きていく上で、人として成長できる経験をさせていただきました。もっと大きく羽ばたきたいと思う訪中でした。本当にありがとうございました。

「将来の私が中国とどのような姿勢で関わっていくか」
3-A 金沢大学　倉田佳祐

訪中前、私は中国に対するイメージや理解が漠然としていました。日本では、中国語を話す人々は直接的でありながらも、異文化間の交流においてはクローズドな側面があると感じていました。特に留学生との交流では、彼ら同士で固まることが多いと感じました。また、私がマレーシアに留学していた時、寮で中国人 1 人と韓国人 2 人と日本人の私、計 4 人で共同生活をしていました。その際は、彼が年下でありながらもルームメイトの中で最も自己主張が強い存在であることに触れ、同じ東アジアでありながら年齢や上下関係に対する考え方の違いに戸惑いを感じたものでした。

しかし、訪中後にはこのような単純なイメージや判断が根本から覆される体験をしました。中国は単一の文化を持つ国ではなく、東西南北によって多様な文化や言語が根付いていることを深く理解しました。特に北京では、日本で聞かれる空気の汚染や混雑というイメージとは異なり、驚くほどの清潔さと芸術性豊かな高層ビルが印象的でした。北京首都国際空港も、東アジアの航空ハブとしての機能が顕著であり、日本の主要空港とは一線を画す存在であることを認識しました。

歴史的な遺産に触れる機会も多く、万里の長城や兵馬俑などはその壮大さと歴史の重みに圧倒されました。特に兵馬俑の存在感は、中国の歴史と文化の深さを改めて感じさせられるものでした。また、観光施設としての整備が進んでいることもあり、これらの場所では中国の歴史や文化への尊重が強く感じられました。

西安では、地方都市でありながら近代的なインフラが整備され、シルクロードの影響を感じる建物が多くありました。西安外国語大学では、一緒に交流した学生からお土産をもらったり食事を奢ってもらったりして、ボランティアとしての姿勢だけでなく個人としての交流が深まり、中国式のおもてなしを体験しました。また、西安ハイテク産業開発区では、その広大な土地と工業団地の発展に驚かされました。日本でも関東平野があるものの、中国の規模は違うという実感を持ちました。

上海では、浦江や浦東国際空港の発展が目立ち、浦東国際空港では厳重なセキュリティ対策が取られていることも印象に残りました。経済力と現代化の進展がこの都市に強く反映されており、中国の成長のスピードと規模に改めて驚かされました。

これらの体験を通じて、私の視野は大きく広がりました。中国は一つのイメージで捉えることができない多様性を持ち、その文化や歴史は深く、多岐に渡るということを痛感しました。これからは、日本と中国の間での文化交流や経済協力が一層重要になると感じています。個人的にも、中国との深い理解を深め、将来的には両国の相互発展に寄与したいという強い意志が芽生えました。また、異なる国や文化との交流を通じて、自分自身の成長も感じました。特に製造業の分野でのキャリアを目指している私としては、中国との競争や協力関係の重要性を改めて認識し、その分野での貢献を目指す決意を新たにしました。総じて、この訪中

の経験は私の人生において大きな意味を持ちます。これからも中国との関係を深め、個人としても発展させていきたいという思いが強くあります。

「「出会いで君は変われる」を実感した訪中」
3-A　愛媛大学　黒川健朔

私はこの度、2024 年日中友好大学生訪中団第 1 陣の一員として、人生で初めての訪中を経験した。1 週間で北京、西安、上海の 3 都市を訪問する中で、各都市での大学交流や中国の文化、生活習慣を体験することが出来た。まさに自らの五感で中国を体感できたことは、私自身の価値観に少なからず影響を与えたと確信している。将来の日中両国の関係を支える立場にある若い世代の私たちにとって、この 1 週間は日中両国にとってかけがえのないものになったと思う。

6 月 24 日、羽田空港を出発し数時間のフライトを終えて中国に入国した。空港内で流れる中国語のアナウンスやバスでの移動中、車窓から見える市内のガラス張りのビル群、クリーム色が特徴のアパート、走行する電気自動車、今も残る昔の城壁の跡を目にした時、自分が中国に来たことを実感した。メディアを通さない、目に映る一瞬一瞬の生の中国の景色がとても新鮮であった。訪中の間に訪れた万里の長城や景山公園から見た故宮、大雁塔、始皇帝陵兵馬俑、西安城壁(永寧門)といった数々の歴史的文化財は、その荘厳な美しさもさることながら、中国という国が持つ何千年という悠久の歴史を感じることが出来た。また、この訪中期間、私たちは毎日美味しい中華料理を堪能させていただき、日本で見たことのあるものから初めて食べるものまで様々な料理を楽しむことが出来た。辛さで有名な四川料理や麦粉を使用した北方料理、北京で挑戦した豆汁(豆乳を乳酸発酵させたもの)、水がとても美味しいという浙江省など、中国国内でもそれぞれの土地や地域に根差した郷土料理や特徴があり、個人的に各都市を訪れる 1 つの楽しみになった。

毎日が刺激的で新しい発見に溢れていた今回の訪中、その中で出会った素敵な言葉がある。それは題名にもある「出会いで君は変われる」という言葉だ。最後はこの言葉について今回の訪中体験を交えて紹介しようと思う。実はこの言葉は、訪中団の川津隆団長が私たち団員に送った言葉である。当初私はこの言葉の意味をしっかりと理解できていなかったように思う。何となく心の中に置いた状態で一週間を過ごしていた。しかしながら訪中を終えた今、私自身が自分の体験を振り返った時、まさに今の自分の気持ちを代弁する言葉であることに気が付いた。私の訪中前に漠然と抱いていた中国に対するイメージは、隣国のライバル的な立ち位置というイメージであった。古くから両国の発展に大きく寄与してきた存在として、切っても切れない存在であると認識している。今もその認識は変わらず、これからも友好関係を持続し、アジアを代表する国として切磋琢磨し、世界に貢献する両国になってほしいと切に願っている。日中友好の基礎は若者にあり、それぞれの進む道で私たちは将来の日中友好の架け橋になると確信している。この訪中では全国各地から集まった個性豊かな大学生や中国の学生、協会事務局の方々などたくさんの出会い、交流があった。帰国してから時折、日中友好の実現に私自身何ができるだろうと考えることがあった。その答えは未だに出ていない。しかしながら訪中での出会いや発見から 1 つの道が見えたような気がし

ている。それは専門性を活かした都市開発やインフラ整備に携わることである。北京で見た立体的な道路の構造や林立するビル群、歴史的な建造物の保護、人口が集中していることによる渋滞や通勤の遅れ、西安で見学したシルクロード科学園で聞いた中国の開発区の仕組みや将来の都市構想、上海の自家用車の増加規制の事実などたくさんのことを学んだ。日本の技術と中国の技術をつなぎ合わせていきたいという思い が、漠然とした中国と日本の間をつなぐ要素として、私自身の専門性という１つの点と今回の訪中での「出会い」によって得られた中国の社会インフラの新たな知見という１つの点がつながり、私にとっての日中の架け橋を見つけることが出来た。この訪中で見たもの、聞いたこと、話したこと全ての「出会い」が私の中国との新たな関わり方を教えてくれたような気がしている。この発見を日中友好の一つの形として将来貢献していきたいと思う。最後に今回の訪中を企画、運営、随行してくださった協会事務局の方々、学生の皆様にこの場で感謝申し上げます。

「笑一笑」
3-A　横浜国立大学　小杉司雄

外国人と交流するとき、自分にとって最も大きな壁は何だろうか。同じ日本というバックグラウンドを共有しないことは怖いことだろうか。もちろん好きな国・嫌いな国はあるかもしれないが、訪中を終えた今、それはせいぜい言葉という道具の違いでしかないように思う。

この訪中は私にとって初めての海外の体験だったから、まず意識の変化は日本を相対化することから始まった。空港に着いて外国人ゲートの方を渡る。ここでは中国が自国であり、中国史は自国の歴史である。自分が今まで体験したすべての出来事が日本という島国でのことに過ぎず、ここは全く新たな世界なのだと思うと一気に視野が広がる気分だっ た。ゲームでいえば新しいマップが開かれるようなものだ。周りの団員は日本語を話すが、それを除けば日本語は見ることも聞くこともない。他の国を訪れるということ、特に日本の場合は他の言葉の世界に踏み入るということ、これは自分自身を相対化する体験になる。
私が北京で最初に得た感覚はこのようなもので、日本と中国とを別個に捉えるものだった。

しかし中国に馴染んで彼らの日常を知るとともに、むしろ自分たちとの同一性を感じるようになった。
旅程では中華料理を沢山頂いたが、我々が宴会をする横のテーブルは現地の家族連れの方がいる。私たちが口に合わないと思ったり見た目に驚いてしまうような料理も、彼らにとっては共に生まれ育った家庭料理であり懐かしい味なのかもしれない。
上記の志望動機もあり、最も待ち望んでいた時間が学生交流だった。北京外語大では「菀ちゃん」「董くん」が流暢な日本語で迎えてくれた。コミュニケーションでは言葉が一番の壁になるので、それを向こうの方から打ち破ってくれるのは有難かった。私たちは大学生活の相違点について話し合った。学内見学では所々の写真を撮ったり連絡先を交換したりして、菀ちゃんがとても楽しそうなのを見てこちらも嬉しくなった。西安外語大では張くんが案内してくれた。「自分の日本語は上手くない」なんて言っていたが全然そんなことはない。講演の歌について説明してくれたり、地下通りで私が「あれ、食べてみたいな」と言ったらすぐに寄ろうとしてくれたり、言葉よりも温かく感じられる「おもてなし」の精神は日本人以上だった。途中、日本のサークルの多様性の話になる。私が隠れんぼのサークルに入っていることを話すと、「それを大学でやるのは面白い！」と笑ってくれた。その夜もチャットで話し、互いに相手の国に行ったときはまた会おうと約束した。お互いに異なるバックグラウンドを持った二人が同じことで笑い合えている、それだけのことが非常に尊く感じられた。

笑顔については、北京のバスガイド・苗さんが最後にしてくれた話を思い出す。「言葉が通じなくても笑顔は通じる」というものだ。だから皆でバスの運転手の方にお礼を言ったらちゃんと笑ってくれたし、手を振ったらハンドル片手に振り返してくれた。一瞬の事なのに予想以上のフレンドリーさが印象に残っている。

ある夕食で、女性の店員さんがスープを一人一人によそってくれた時があった。中国語で説明してくれるのだが私たちにはよく分からず笑ってしまったのだが、彼女もそれに連られて笑っていた。

別の食事では、班の友人が店員さんに料理の感謝を伝えるために「おいしい」と言ってみるのだが、向こうは何のことか分からずに困り顔になってしまった。やっとのことで「好吃」が出ると、店員さんは安堵したかのように、でもやはり若干困惑して去って行った。言葉が通じると本当に嬉しいもので、本当の意味で中国のコミュニティに入り込めたような気分になる。しかし北京の街を歩いて地元の男性に道を尋ねたときは、言葉が分からなくてもジェスチャーで気さくに教えてくれた。

激動の一週間だったからこそ、些細な瞬間の中に垣間見えた彼らの人情に感銘を受け た。心の距離がぐっと縮まり、私と彼らで違うことはそう多くないのではと思うようになった。もちろん育った環境が違えば価値観も違うだろうし、言葉が違えば考え方も違うだろう。しかし自分たちと同じように笑う向こうの人々を見て、互いに分かり合えないほどの障壁はもう感じられない。決して異質ではない他国の人々を理解するための土台、この意識を今回の訪中の個人的な意義として大切にしたい。

「大局で考え、足下で行動する」
3-A　早稲田大学　齋藤凜花

今回、日中友好大学生訪中団の一員として中国を訪れた　1　週間は、学び溢れる刺激的な日々であ った。世界的な大国となった中国の最前線をこの目で見て、驚きとともに、私たちが何を未来へ繋 げられるかを模索する日々であった。例えば少数民族の文化や言語の保護、教育機会の拡充など、少数派の権利向上に向けた取り組みが行われていることも、実際に見聞きすることができ、国際社会における多様性と共存の問題に対する解像度を高めることができたと感じる。何よりも「大局で考え、足下で行動する」ことの重要性を痛感した研修であった。以下に、訪問した都市である北京、西安、上海で感じたことや考えたことについてまとめたい。

北京は中国の首都であり、政治、文化、歴史の中心地である。景山公園や紫禁城、万里の長城など、歴史的な名所を訪れることで、中国の豊かな歴史と文化に触れることができた。また、現代の北京は非常に発展しており、高層ビルや最新のインフラが整備されている様子も印象的であった。北京外国語大学での交流では、現地の学生たちと様々なテーマについて意見交換を行った。環境問題や国際関係、文化交流、そしてそれぞれの進路や結婚観、人生観について話し合う中で、お互いの視点や考え方に触れることができ、非常に有意義な時間を過ごした。彼らと今後の国際関係について議論した際、彼らは中国全体の政策や国際的な視点を持ちながらも、日常生活での小さな行動が大切だと強調していた。まさに、日常的に第二ヶ国語、第三か国語を学ぶことや、数多の報道から正しい情報を選択して入手する（Instagram　や　X　といった本来であれば情報統制の対象になりうる　SNS　のアカウントを持っていたことも印象的だった。）ことが、大きな社会課題の解決に繋がるという考え方であり、大変印象的だった。また、「率直に中国のことどう思う？」と聞かれることもあり、私がその質問の意図を問いかけると、「中国に対してあまり良い印象を持っていない日本人も多いと　SNS　で目にしたから…」とこぼしてくれた。その言葉の持つ真意は分かりきれない部分もあるが、彼らがいつか日本に来た時に、温かい人たちが迎えてくれること、彼らの日本に対する思いや考え方に変化をもたらす経験ができることを願ってやまない。
西安はシルクロードの出発点、そして古代中国の首都であり、世界史を専攻してきた私にとって　長年の憧れの地でもあった。兵馬俑や大雁塔などの歴史的遺産を訪れることで、中国の古代文明の偉大さを実感すると同時に、西安の街並みや市場を歩く中で、伝統的な文化や生活様式に触れることもできた。西安外国語大学での交流では、ペアとなった学生が非常に温かいもてなしをしてくれ、今でも SNS で日常的に交流をしており、まさに「ホストシスター」と呼べるような存在が中国にできた。

最後に訪れた上海は中国の経済の中心地であり、国際都市としての顔も持っていた。上海外灘の夜景や国際金融街、上海タワーの眺めは圧巻であり、近代的な都市の一面を感じることができた。また、春から外資系企業で働く私にとって、就職活動やその後のインターンな

どで、上海駐在という言葉は日常的に耳にすることも多く、いつか働くかもしれない上海の地に親近感を覚えた。

今回の訪中は、私たちにとって非常に貴重であり、何にも代え難い日々となった。中国の歴史や文化、現代の発展を直に感じることができ、また現地の学生たちとの交流を通じて、言葉だけでは決して形容できない多くのことを学んだ。古来より、政治から社会制度、文化に至るまでその背中を追い続けながらも、戦争という負の歴史を機に、近くて遠い存在になってしまったと感じていた中国。今回の派遣を通して肌で感じたことを忘れず、日中関係を軸に世界の課題を捉え、学んだことを日本での実践に活かすことで、多様性が尊重される社会の構築に携わりたい。

末筆ではありますが、団長や友好協会の皆さま、個性豊かで日々たくさんのパワーをくれた 3A、 3 号車のメンバー初め、多くの方に感謝申し上げます。

「中国へのイメージを再考する　キーワードは「相互理解」と「対話」」
3-A 岐阜大学 坂井 泰智

正直、中国に行く前、私は日本の現状を少し悲観していた。数年前は世界 GDP でも世界第 2 位の経済大国として世界を牽引していたはずの日本が、中国に追い抜かれ、最近ではドイツにも追い抜かれ、果たして日本は大丈夫なのかという思いがあった。また、日本を追い抜いて、今や世界 1 位に君臨した中国とはいったいどんな国なのか、見てみたいという好奇心もあった一方で、日本との差を見せつけられることになるのではと少し怖さも感じていた。

中国は急激な経済発展を成し遂げ、今や世界 1 位の超大国である。その 超大国」っぷりは、1 週間の訪中で訪れた観光地の人の多さや、西安で訪れた 3D プリンターをはじめとした最新産業の開発などからも感じ取ることができた。一方で、この経済発展の見逃してはいけない点は 急激」であったことだと、訪中期間中に何度か感じた。 急激」な経済発展の裏には、日本以上の過酷な競争社会や受験戦争が国民に強いられている現実や、国民の能力や成果が 新時代中国特色社会主義思想」として国の発展にダイレクトに活用されている実情があるということを、現地学生との交流を通じて知った。この様な苛烈な競争社会に疲れ、いわばニートのような存在になってしまった人、横平 タンピアン）が出てきてしまうほど、今の中国で生き抜くことは大変であるということを、バスガイドの方が教えてくださったのが印象深く残っている。

中国に対するイメージは 急激な経済発展」だけでなく、 マナーが悪い」というものもあった。日本では、中国人はマナーが悪いという報道がよくされる。そして私も 中国人はマナーが悪いものだ」というステレオタイプ的なイメージがあった。しかし、日本人の価値観から言うところの マナーが悪い」状態も、兵馬俑に行った時の経験を照らし合わせると、そうせざるを得ない理由が見えてきた。まず観光地はどこも大量の人がいた。兵馬俑に行った際は、ドーム状の空間に所狭しと人が入っていたため、兵馬俑を見ているのか、観光客を見ているのか判らないほどだった。そんな状況で、日本人的礼儀である 列を並んで観覧しよう」とすれば、間違いなく最後尾の人が見れる頃には太陽は沈んでしまう。つまり、人が多すぎる中国で 列に並ぶ」という価値観を持ち込むとあまりに効率が悪いのである。日本で生活をしていると、 あの中国人は列に並ばない。なんて行儀が悪いんだ。」と感じてしまう人も少なくはないだろう。しかし、ここでの行儀というのは、あくまで日本人、もっと局所的に言うのならば、その人のもった価値観の中にある 行儀」に過ぎない。また目の前にいる人だけを見て、 中国人」という帰属集団で判断してしまう事実も、改めるべき価値観だと感じた。

日中関係が緊迫する今、国単位で印象を判断するのではなく、相手のことを知ろうと思う気持ちを持って目の前にいる相手と対話することが大事だと実感した。今回の訪中では、多くの現地学生と交流する中で、今の中国の実情を知る機会がたくさんあった。そのような機

会の中で、目の前にいる相手を 理解したい」、 理解してもらいたい」という気持ちが醸成される際、 この人は中国人」とか、 日本人」といった、その人の帰属は全く意識していないことに気づいた。つまり、僕が興味があるのは、 中国人の〇〇さん」ではなく、 目の前にいる〇〇さん」なのである。この様な価値観が日中友好のカギになるのだと考える。僕には詳しい政治の世界は分からない。しかし、僕はこの訪中団を通じて大切な 友達」がたくさん増えたような気がした。

今回の訪中を通じて、中国の急激な経済発展や厳しい競争社会の実態を目の当たりにし、先入観を再評価することとなった。また、中国人の 行儀の悪さ」とされる行動も、背景を理解することで異なる視点を持つようになった。この様な新たな発見は、国籍やステレオタイプを度外視して、個々の人々との交流を通じたことによって生じたものである。このような相互理解と対話こそが、日中友好の鍵となると確信することとなった。一方的に悲観したり、差別的な感情を持ったりすることなく、相手を知ろうという気持ちをもって関わる事で、両国は切磋琢磨しながら世界を牽引する二大超大国になるだろうと確信する旅となった。

「ある私の知らない中国のひと」
3-A 国際基督教大学 髙田聖佳

6 月 24 日。江蘇省蘇州で日本人学校のスクールバスで、日本人親子が刃物を持った男に襲われた事件で、男を止めようと親子を庇って重体となっていた中国人のスクールバス同乗員だった女性、胡友平さんが 6 月 27 日に亡くなった。襲われた日本人親子は無事だった。

6 月 28 日の昼。私たち 2024 年日中友好大学生訪中団第一陣はバイキングレストランの席に各々着席した。食事の前に協会スタッフが一同の前に立ち、この事件と胡友平さんの死を団員に知らせ、団として彼女の死を悼んだ。

話のあと、私は豪華なバイキングで自分の昼食を取りながらこの事件について悶々と考えを巡らせていた。日中友好大学生訪中団の一員という立場を背負う以上、私はこの事件についてしっかり向き合って考えなければならなかった。

その日、私たちの旅は 7 日間の内既に 5 日目で、残す研修もいよいよ大詰めを迎えていた。その後も私たちは様々な中国の名所を巡った。壮大で美しい中国の風景や美味しい料理を楽しみながら、私は頭の片隅で、常に胡友平さんのことを考えていた。

胡友平さんの行動が、この国境を越えた優しさの延長線上にあると思えてならない。そして同時に、この国で日本人に刃をむける人がいるという残酷な現実もこの事件で顕在化してしまった。

複雑に絡み合った歴史の上に成り立つ現代の日中関係において、両国の人々が互いに抱く憎しみの存在することは認めざるを得ない。私は、日本のメディアから憎しみや恐怖の交じった中国イメージを浴びて育ってきた。しかし、私の身の回りには多くの優しい中国の友人もいた。彼らから聴く中国の話は異文化に溢れていて面白かった。私にとって友人の話はメディアなんかよりずっと現実味を帯びて聞こえた。いつの間にか私は中国に惹かれていた。

それで、私は中国に興味を持つようになり、今回の訪中団への応募にも至った。元々私は中国は「面白い」ところだというイメージを持っていたし、実際訪れて触れる真新しい事物に私の知的好奇心は常に刺激され、益々中国を好きになった。

私の目に映るもの全てが面白かった。万里の長城、紫禁城、兵馬俑、西安の城壁、外灘の夜景。全ての景色が圧巻で、中国の壮大さを身をもって実感した。食事は常に食べきれないほど円卓いっぱいに提供される。お皿が乗せきれなくて、お皿の上にお皿を置く。全ての料理が面白く、美味しかった。私は中国に生きる人々も好きになった。国の人々は異文化を持ちながらも、結局は同じ人間だ。北京と西安の外国語大学で知り合った中国の大学生と今でもチャットが続いている。中国の学生が私たちの文化や社会に興味を持って、言語を真面目に学んでくれていることが嬉しい。共通のアニメの話題で盛り上がった。西安空港のスタバのスタッフさんが「カワイイ！」とカタコトの日本語で声をかけてくれた。私は拙い中国語

で「シエシエ」と笑って返す。レストランで訪中団の友達が「ハオチー！」と店員のおばさんに声をかけると、－私は中国語がわからないので、実際に何を言っていたのかは正確にわからないが－「ハオチーならもっと食べな！」と言わんばかりに、おばちゃんが勝手に皆の器いっぱいに麺を盛り付けていたのがおかしくて、私はずっと笑っていた。

胡友平さんが日本人親子を男から庇ったのだって、そういう国境の存在しない人間的な優しさからの行動だったのだろう。私は彼女のことを知らない。しかし、彼女は今回の旅で関わった、優しい中国の人々の 1 人なのだ。そんな彼女が、日本人を庇って、同じ中国人男性に殺されてしまった。私が中国の人々の人情に満たされている中で起こった事件だった。目の前にいる親子を咄嗟に守った中国・蘇州に生きる普通の優しい人。知らない人なのに、蘇州も行ったことないのに、私が中国にいる間、彼女のリアリティは増すばかりだった。

そして、中国人の優しさばかりに触れてきた私にとって、中国人の男性が日本人親子に刃を向けたことも、依然として不安定な日中関係を思い出させる唐突な事件だった。あまりに中国の人々に良くしてもらって、私は日中関係の複雑さを忘れていた。

あまりに悲しい事件としか言いようがない。中国人のおばちゃんが、日本人親子を庇って、中国人の男性に殺されてしまった。この事実だけが、私の幸福な中国研修においてずっと頭の奥に重くのしかかっていた。

私は中国の人々を愛している。日本の人々も愛している。目も当てられない残酷な現実がある。国境とはなんて煩わしく、難解な境界線だろう。

私はただ、ひたすらに胡友平さんのご冥福を祈る。そして、これからも私は今ある中国の友人を大切に、ともにこの複雑でどうしようもないような「今」を生きていく。

「伝統と先進性を有する中国」
3-A 東洋大学　多田悠人

私は、計 7 日間に渡る中国訪問研修に参加した。目的は、実際に中国の文化を体感し、中国の実態を知ることである。このために、中国人学生との交流や中国国内のあらゆる事物に対する観察を行なった。その結果、中国は伝統を守りつつ、先進性を持つ国であるという認識を抱いた。

まず古箏の演奏と漢字文化から、中国の伝統を守る姿勢が感じられた。具体的には、西安外国語大学の学生 2 名によって古箏と書道の実演が行われた。中国の伝統的な弦楽器である古箏の演奏と日中友好の意が込められた書道の実演が披露された。私は演奏を見て、何故古箏と書道が組み合わされているのか疑問を抱いた。すると、西安外国語大学の学生が、唐代に古箏を演奏しながら書道を行うことが娯楽であったことを教えてくれた。この体験から、中国人学生の自国の文化に対する深い理解を実感した。

また中国国内の事物に対する観察を通して、中国における漢字の優位性を感じた。具体的には、バスでの移動中に見えるお店の看板のほとんどが漢字表記であった。また、共産党歴史博物館を訪れた際に、中国語の解説しか表記されていないことに驚いた。これらの中国における漢字の優位性から、中国の自国の文化を大切にする姿勢が感じられた。

そして、中国人学生の AI への関心の高さと上海の EV 推進政策から、中国の先進性を実感した。具体的には、北京外国語大学で就職をテーマとしたディスカッションを行なった。今後成長する業界は何かという話題になった際に、中国人学生が AI であると答えた。私は自社内に SE を持つ日本企業が少ないという実態から、日本において IT が成長産業であると考える。両国における成長産業の違いから、中国における情報技術の先進性を実感した。また上海の車事情から、上海における EV 推進の積極性を感じた。上海を走る車のナンバープレートには青と緑の 2 種類が存在し、青いナンバープレートの取得には約 180 万円が必要となる。一方緑のナンバープレートは、EV 車への乗車を条件に無料で取得することができる。この上海における EV 推進政策から、上海における環境意識の高さを実感した。これらの体験から、中国は伝統を守りつつ、先進性をもつ国であるという新たな認識を抱いた。中国に対する認識の変化から、今後の日中関係において大切なことは、相手の文化をよく知ることなのではないかと考えた。このために、個人として認識の狭さを自覚し、本物を見ること及び人との交流を大切にしていきたい。

7 日間の中国訪問から、中国は伝統を守りつつ、先進性を持つ国であるという認識を抱いた。その理由は、中国人学生との交流や現地で見た物を通して、自国の文化を大切にする姿勢や AI と環境意識の高さをはじめとする先進性を持つ国であることが分かったからである。中国に対する認識の変化から、現地における人との交流と観察によって、相手の文化をよく知ることが重要であると考えた。今回の中国訪問での出会いを大切にし、今後も交流を続けていくことで、さらに中国への理解を深めていきたい。

「訪中を終えて」
3-A　神奈川大学　寺田百伽

遡ること５年前、父親の中国出向が決まった。そして今もなお中国に在住している影響で、情報を耳にする機会は多くあった。そんなきっかけゆえに、脳内に想像上の中国があり続けた。今年の３月、ようやく足を踏み入れることができた。英語が通じない、受け入れてもらえないことの現実を目の当たりにした。言語が通じなくても翻訳機を使ってわかるまで説明してくれた中国人、中国語がわからないなら相手にすらしてくれない中国人、どちらにも出会った。現実を受け入れると共に、この国の人々が日本人、ひいては外国人に対してどのような感情を抱き関わっているのか、興味を持つきっかけになった。また、大学で外国人への日本語教育の学習をしている。その中で中国残留孤児の存在に触れたことがきっかけで日中の歴史にも目を向けることとなった。その国の歴史を知ることは、外国人である相手を知ることに一歩近づけるのではないか、と考えている。このような多くの関心が私を今回の訪中団参加へと導いてくれた。

今回の訪中で感じたことが大きく３つある。１つ目に態度で気持ちを伝えることの大切さだ。西安外国語大学にお邪魔した際、マンツーマンで中国人学生がキャンパスを案内してくれた。彼女は日本語学習歴２年であり、翻訳機を使いながらも必死に日本語を使って会話しようとしてくれた。また、おもてなしの姿勢も素晴らしく、花束やジュース、更にはぬいぐるみをプレゼントしてくれたのである。その姿勢に感動したと同時に、どれだけ言語を介した中身のある話ができるか以上に、気持ちを伝えようとする姿勢が大切だということに気づくことができた。私はヨーロッパに留学した際、言葉の壁に何度もぶち当たった。自分の思ったことを伝えられなければ、自分を理解してもらえないのではないか、と。しかし、今回の訪中での彼女との出会いがそれ以上に大切なことに気づかせてくれ た。その姿勢に嬉しさを憶え、言語はその国を理解しようとしていることを現地の人に示せる大きなものであると再認識することができた。

２つ目に中国という国の解像度を上げることができたと感じている。中国の北と南では言語が異なるため意思の疎通に苦労することがあること、百個受けて一個受かれば良いほどの厳しい就職活動、企業見学にてカメラにシールを貼られ、剥がしたらバレる仕組みになっているほどの監視社会、上海の自家用車の青ナンバープレート取得に 180 万円ほどのお金を要すること。知らなかった中国を少しだけ理解できたことにワクワクした。そして西安外国語大学にて、中国の歌や踊り、琴などの現地文化を披露していただき、なおかつクオリティが高かったことに感銘を受けた。対して、日本人で日本文化を披露できる人はどれほどいるのか考えてみた。おそらく数少ない。自国の文化に誇りを持ち、より深く知っていきたいと感じた。また、万里の長城、兵馬俑、大雁塔、永寧門をはじめとした様々な歴史ある建物に圧巻された。それと同時に歴史を深く知らない自分が恥ずかしくなった。中国理解に努めていきたいと強く感じた。

３つ目に、今回の訪中のテーマである日中友好について考えたことについて述べたいと思う。日本人が中国に入国するには未だビザが必要だ。多くの国に対しノービザ措置を導入しているにも関わらずだ。冷え込んだ日中関係を示している。政治的問題に関して、国民の力でどうにかするのは難しいと感じるのが正直なところだ。「日中の政治関係は厳しいが、人と人の関係はそれには関係していないと思う」。これは西安ガイドをしてくださった中国人学生の言葉である。この他にも日本に好意がある沢山の中国人に出会い、心が温まる思いだった。メディアの影響で中国に悪い印象を持つ日本人が多いのは事実だ が、固定観念を持ちすぎずに中国人と関われる人が増えることを祈っている。また訪中した身として、中国の良いところをもっと見つけることに尽力し、それを広めていきたい。

最後に今回の旅に携わってくださった日中友好協会事務局の皆様、誠にありがとうございました。また、個性豊かな３Ａ の皆と一緒に旅ができたことは一生の思い出です。それぞれバッググラウンドが違う中、様々な経験、考えを持っている人たちと仲良くなれたことは私の人生における大きな財産になりました。ありがとう！！

「訪中を終えて考えたこと五感で得たもの」
3-A 京都外国語大学 長島悠花

この度公益社団法人日本中国友好協会様に 2024 日中友好大学生訪中団第 1 陣に参加できる貴重な機会をいただき、中国の北京・西安・上海の各都市を巡ることとなっ た。そもそも本団への参加を志望したきっかけは、大学での中国人の友人との出会いである。彼女との関わりまた竹内亮監督による作品を通して、中国の多様性を実感し、中国の「ありのまま」を理解したいと強く思ったのである。このような動機を踏まえて、本文では、今回の訪中を通して自分の五感で得たものを率直に述べていきたいと思う。

実際に現地に立つことで見える中国とはどのようなものだろう。そんな気持ちを持って中国で過ごす中で最も印象に残ったエピソードがある。最終日夕食会場へ移動中、当会場があるホテルのエレベーターに乗る際、現地のガイドさんに「乗りなさい」と少し強く急かされた。彼女の迫力に若干気圧されながらも私たちが乗り込むと、彼女はそんな様子を見てか、中国では人が多いため、いつまでも譲り続けていたら永遠に機会を逃してしまう、だからこうすることも時に必要なのだと説明してくれた。その説明を聞いて、私は日本で「中国人は割り込みが多い」と言われることを思い出した。このエピソードから、このような行動の背景にもこうした文化や現地の事情があるのではないか、そのように考えるようになった。異文化交流において自文化との違いに抵抗感を持つことは少なくない。しかし「なぜ」を知ることで相手を理解できるきっかけとなる。つまり、文化や現地の状況を理解することは、相手の行動原理を理解することにつながるのであると実感した。また一方で、異文化交流においては人間を個人として捉える考え方も重要であると実感した。今回の訪中において、様々な「中国人」に出会った。世代や出身が異なれば、考え方も話している言葉も全く異なる場合もある。一般化された文化を理解することももちろん大切であるが、一括りで捉えるのではなく、個人として関わること。中国はその大切さに気づかせてくれる、最も適した国であると思った。

また、このように中国の多面性を実感したことで、自らの生き方に対する考え方にも大きな影響があった。街中を移動中、その中を聳え立つ何十棟ものマンション、道路を行き交う多くの車やバイク、広場に集まりそれぞれに楽しむ多くの人々。私自身日本の田舎で生まれ育ったため、周囲にこれだけ多くの人々と共に生活するという状況を想像するのは容易ではなかったものの、こうした光景を見て 14 億人という信じられないほど多くの人々が共に住んでいるのだということを少しずつ理解できるようになってきた。そうした中で、多くの人々が「生きていく」ために、「良い」大学に行き仕事を得ることを目指し、幼い頃から苛烈な競争の中で生きていく社会。私自身進路について悩むことが多かったが、現地に住む人々に想いを馳せることで、他人に言われたことや世間で「正しい」とされていることにただ従うのではなく、私自身が人生で成し遂げたいことに意識を向けることが大事なのだということに改めて気付かされた。

最後に、訪中を通して得た気づきを踏まえ、今後の日中関係について述べたいと思う。歴史的にも経済的にも深い関係値のある中国と日本は、これまでもそしてこれからも切っても切れない関係であるだろう。だからこそ、両国とも敵対よりは友好的な関係維持・発展を望んでいるはずである。現実問題、国家としてそれぞれの国益がある以上、国家間関係としては強かで戦略的な付き合い方が求められるのかもしれないが、一方で国家間関係の礎となる文化・人的交流や対話はより一層必要であるだろ う。偏見や固定観念、フェイクニュースに振り回されず、それぞれの良さと欠点を十分に理解した上で、これからどうあるべきかを自らの頭で考えることこそが大切であるだろう。

改めて、今回の 2024 日中友好大学生訪中団第 1 陣を支援してくださった中国政府、主催・運営してくださった日中友好協会と中日友好協会の皆様、その他関係者の皆様に感謝申し上げます。

「交流がもたらす未来」
3-A 法政大学　奈良　美咲

私は今回の訪中経験は、団長の「出会いで人は変わる」という言葉の意味を実感するものであったと感じている。

私がこの団に応募したきっかけとして、高校生の頃に私の家にホームステイに来た、中国四川省からの留学生との出会いが大きな影響を与えている。中国と直接関わった事がなかった中、中国に対するイメージは、メディアや教科書を通して形成されていた。過去の歴史を学ぶことは重要であるが、それにより色眼鏡で見てしまっている点も無意識のうちにあった。そんな中、ホームステイに来た留学生との出会いにより私が中国に抱くイメージが大きく変わった。一人の中国人留学生と交流したことにより、国と国で考える中国ではなく、人と人との繋がりから中国を見る視点も得た。四川省育ちの彼女と出会い、四川の発展度を知り、中国の同年代の学生が如何に学業に励んでいるかを知り、中国をより身近に感じるようになった。しかし、実際に私が中国へ訪れた経験がなかったため、近くて遠い国というイメージは残ったままであった。

今回の訪中で最も印象に残っていることは、中国人との関わりである。私の中では北京のガイドさんの印象がとても残っている。彼女は笑顔でずっと中国の歴史を教えてくださった。何よりも彼女の笑顔と明るい性格によりバスの中が明るく、終始温かい気持ちで中国の街、歴史を見る事ができた。堪能な日本語で解説をしてくださり、知識量や、中国人の人を楽しませようとする心、そして温かさを感じた時間であった。人が人に与える影響の大きさを強く感じた。ある人のイメージがその人の国のイメージを左右する力もあるのだと感じた時間でもあった。

また、外国語大学の方々との交流も印象にとても残った 1 幕である。北京外国語大学での 交流では、学生の就職活動や、結婚観などについて教えてもらった。自分達の人生を大切にしながら、勉学に励み、将来についてよく考えていることに感銘を受けた。手を繋いでゲームをした際には、日本人と中国人の学生達が、心から楽しんで交流している事を実感し、若い学生達が、正面から人と向き合って交流する事で、将来の日中友好にポジティブな影響を与える事ができると確信した。同年代の学生と交流している時間は、お互い刺激を与え合うことができ、日中が近くなる大変有意義な貴重な時間であり、あっという間に過ぎていった。西安外国語大学では、キャンパスの広さ、学内に様々な店がある事、図書館で熱心に学業に励んでいる人の多さ、ペアの学生の語学力に大変驚いた。ペアの学生はまだ日本語を本格的に勉強し始めて 1 年と言っていたが、意思疎通、説明を日本語で行ってくれた。短期間でこれだけ語彙力をつけ、話せるようになっている事に鼓舞され、私も勉学にもっと励もうと強く思った。この団に参加し、外国語大学で中国人学生に出会えた事により、私の人生に影響を与えたことは確実であり、この出会いや機会に感謝している。

国ではなく、個人との直接的な関わりは大事である。様々な人々がいる事は承知の上であ

るが、国民性というものはあるのだと私は感じた。中国人が、中国は人口が多いから主張する事は大事だと言っていた事が印象的であった。混雑した観光地で写真を撮る際に、どこからともなく現れて前で写真を撮っている人がいたり、露店の方々は、積極的に私達に声をかけにきていた。私が出会った中国人の大半の方は、意見をハキハキと伝える人であった。堂々とした姿勢が良く思われる事も、否定的に思われる事もあるのだと感じた。日本では謙虚さが大切とされている。そこが思いやりのある事に繋がっている。一方で、主張の薄さにも繋がっているのかもしれないと感じた。自分が、気がつかないうちに、育った地域の価値観を、当たり前としてしまいがちである。しかし、その価値観がどの国でも一致するとは限らない。人と交流する際、その国の歴史と国民性を知っておくことは、その人と関係を構築する際に、重要な事であると、今回の訪中で感じた。

私は国々が良好な関係を築くには、国という垣根を超えた人々の直接的な交流、そして、偏っていない、複数の視点からの情報・判断が大切であると考えた。

「実体験から本質を学ぶ」
3-A 上智大学　長谷川琴子

今回日中友好大学生訪中団の団員として中国を訪れた 1 週間は非常に学びの多い、刺激的な日々であった。本レポートでは、今回の訪中で感じたことや考えたことについてまとめたい。

最初の地は北京だった。北京外国語大学との交流では、中国人学生の意識の高さに驚いたことを覚えている。彼らは日本語を流暢に話し、日本文学などに日本人よりも精通していた。交流を通じて、日本に興味を持って好きでいてくれることを嬉しく感じるとともに、自身も彼らのようにさらに勉学に励まなければと刺激を受けた。北京で一番の思い出は、やはり万里の長城である。世界史選択の私としては一生に一度は訪れてみたい地であり、非常に貴重な経験をさせていただいたことに感謝している。長城は実際に登ってみると想像以上の迫力があり、秦時代を始め歴代の中国王朝がどれほど強い力をもっていたかを体感できた。また、紫禁城もそうであるが、歴史的建造物を長い間大切に守っていることに中国人の歴史に対する誇りと尊敬が感じられた。

2 つ目の地は西安だった。まず西安外国語大学では、ペアの中国人学生に大変良くしてもらった。キャンパスツアーだけでなく、中国のお菓子やスイカなどを奢ってもらいあっという間に時間になってしまった。中国では 2 つの大学でそれぞれ盛大に歓迎をしていただいたが、それらは日本の「おもてなし」文化に非常に近く、そこに親近感を持った。西安の開発区見学では、開発の規模感に驚いた。開発計画のレベルは非常に高く、国をあげて注力している様子が分かった。一方でバスから見た街は開発が疎らであり、日本や欧米といった先進国の都市開発とは違う、独特の雰囲気が感じられた。西安の開発は途上国開発に近く、今後東南アジアをはじめとする他の途上国地域の開発に役立てられるのではないかと考えている。西安は中国の古都と言われるだけあって、多くの歴史的建造物に触れることができた。中でも 20 世紀最大の考古学的発見と言われる兵馬俑は圧巻だった。博物館が埋まるほどの人の数と、その中心に堂々と君臨する兵馬俑と秦の始皇帝の墓は異様なほどだった。
最後の地は中国経済の中心、上海だった。フライトの関係で上海には数時間しか滞在できなかったが、クルーズ船からみた黄浦江沿いの街並みはとても綺麗だった。ただ、先進国並みの発展を遂げた上海に感嘆する一方、街中では昔ながらの商店街が軒並みなくなっていることを聞き、古き良き大衆文化が失われていくことに寂しさを覚えた。中国だけでなく世界中で、開発と文化保護が同時に行われるべきだと感じた。

さて、ここからは今回の訪中全体を通して考えたことを深ぼっていきたい。1 つは、実際に現地に行って直接体験することの大切さである。私は今回初めて中国を訪問した。訪中前は学校の授業や日本のニュース、周りからの情報のみで中国を見ていた。しかし、そこには大量のバイアスがかけられ、見えているのはほんの一部でしかなかったことに気付いた。実際に中国に行ってみると、中国はとても広く、様々な人と文化があり、活気あふれる社会で

あることが分かった。良い面も悪い面も実際に見て体験することで初めて自分ごととなる。誰かが言っていることを鵜呑みにせず、自分で足を運んで確かめるべきだと感じた。特に日中関係は複雑だからこそ、一部の情報のみで判断せず、互いに直接交流することを通じて理解を深めていきたい。

2 つ目は、団長が常に仰っていた「出会い」の重要性だ。今回の訪中では、中国の学生をはじめ現地の様々な中国人と出会い、交流した。また、自分と同じように国際協力や平和に興味をもった沢山の日本人大学生と仲を深めることができた。これらの出会いはとても貴重で刺激的であったと感じている。出会いで人は変わる。今回関わった人々の間には友好と平和が感じられ、そこにはニュースで見るような日中の緊張関係は存在しなかったように思える。こうした小さな出会いや繋がりを広げていくことで、やがては社会を動かす渦ができると思った。特に若者は流動的であり活発なため、若者が強い意志と熱意をもって積極的に動くことが日中友好、世界平和へと続くことになると考える。

今回 1 週間という短い時間ではあったが、非常に充実した訪中を経験することができた。ここでの学びを発信し、これからも日中友好や世界平和に向けてさらなる挑戦を続けていきたい。最後に、今回このような素晴らしい機会を提供していただいた関係者の皆様に心から謝意を表する。

「互いに歩み寄ろうと努力することの重要性」
3-A 琉球大学　花輪帆香

私が、訪中を経て考えたこと・感じたことは、大きく 2 つあります。まず 1 つ目は、中国には日本に興味を持ち、快く迎えてくれた人が沢山いたことです。訪中前は、テレビやインターネットなどの影響から、中国人の多くは日本や日本人にあまり好意的でないのではないかと思っていました。しかし、北京外国語大学、西安外国語大学での交流を経て印象が変わりました。まず、北京外国語大学では、班に分かれてゲームをしたり、ディスカッションをしたりしました。ディスカッションでは、中国の学生の大学生活について知ることができました。中国の学生は、どの活動でもとても優しく親切に私たちを気遣ってくれました。また、図書館には私でも難しくてなかなか手を出せないような日本語の本が沢山置かれていて、中国の学生の勤勉さや勉強への意欲の高さに圧倒されました。西安外国語大学では、パフォーマンスを見たり、ペアになって大学を散策したりしました。「ドラえもん」を知っていたり、「君の名は」を見たことがあると言っていたり、日本のサブカルチャーに興味を持ってくれていることに驚きました。ペアの学生と大学の商店街に行き、飲み物を飲みながら一緒に大学を散策したことは楽しかった思い出の 1 つです。日中関係について悪い意見も良い意見も沢山あると思います。しかし、重要なのは国籍で壁を作るのではなくお互い 1 人の人として理解しようとする気持ちだと思いました。今回の訪中で、私は中国の学生と話し、仲を深めることができたことをとても誇りに思います。

2 つめに、今回の訪中で他国を訪れる際は、その国の言語を少しでも学んでから行くべきだと感じました。今回私は、日本語で対応してもらえるということに甘えて、中国語をあまり勉強せずに渡航してしまいました。中国で出会ったガイドさんや学生さんは私たちのために日本語で出迎えてくれました。日本語を使って一生懸命、私たちに伝えようとしてくれている姿には、真心を感じました。この姿勢を受けて、外国語を学ぶことはただ意思疎通するためのツールの 1 つというだけではなく、相手国への尊敬を表現する役割もあるのだと学びました。また、食事をしたレストランでも同じような経験をしました。中国では食事を運んできてくれる店員さんたちは、日本の店員さんのようにあまり笑顔を見せないので、少し怖い印象がありました。しかし、感謝の気持ちを伝えようと中国語で簡単に挨拶をすると、店員さんはとても嬉しそうな表情で言葉を返してくれました。このことから、例え一言しか交わせなかったとしても、お互いに歩み寄ろうと努力したことで嬉しい気持ちを分かち合うことができるなら、言語を学ぶ価値があるなと感じました。また、今は携帯を使えば簡単に翻訳ができる便利な時代です。しかし、それはあくまで連絡手段でしかないでしょう。もちろん、言語を勉強しなくても自分の思っていることがすぐに伝わるかもしれません。でも、それでは真心や尊敬以前に、単純につまらないと思いました。人と向き合う、話すのに苦労して、お互いどうにかして理解しようと頑張るから、楽しいし、伝わる時に喜びが生まれる

のではないでしょうか。他国との交流に限らず、コミュニケーションの根本的な意義を忘れて、時代に流されて、大切にしなければならない部分を省いてしまうような人になってしまわないように何度も自分を見直す必要があると痛感しました。

「近未来都市西安での学び」
3-A 中央大学法学部　巳上小楽咲

大学生訪中団として 1 週間の中国滞在のうちに北京、西安、上海の 3 大都市を訪れた。この 3 都市の中で最も印象深かったのは西安である。それは、「激変する西安」に変わらないものを見つけたからかもしれない。

私は今回初めて中国を訪れた。私は普段中国全般に関する情報に大学の講義やメディアを通して触れ、情報のアップデートを行うことが多い。それでも、西安に関して学んだのは高校の世界史の講義まで遡る。だからこそ、今回の訪問で西安ハイテク産業開発区、別名シルクロードサイエンスシティや 3D プリンターの世界大手 BLT 社の見学を通して見える、近未来都市に発展しつつある西安の姿に衝撃を覚えた。

これまで私の中で西安は歴史の街だった。かつては長安と呼ばれ、シルクロードの東の起点にあたり、周、秦、漢、唐の首都として栄えたことや、兵馬俑があることだけが私の西安のイメージの全てであり、テクノロジーとは程遠い場所に思えたからだ。

西安滞在中、最も印象的だったのは、技術そのものではなく、技術に携わる人々のマインドだった。私たちを案内してくれた BLT 企業職員との交流を通して、日本との意識の違いに気付かされた。BLT はやってみないと分からない、ダメならやめればいいぐらいの気軽さで、先行投資を行ってきたことによって世界企業に成長した。これを聞いて私は、失敗を恐れないどころか、むしろ学びとしてポジティブにとらえるような価値観が中国社会全体に浸透していると感じた。挑戦することへの心理的抵抗が大きく、失敗をリスクとして避けたがる日本とは真逆の印象を受けた。軽やかに試行錯誤していった結果が、この西安の発展の秘訣だと感じた。

このような進化が目まぐるしく進む西安では、現地の大学生との出会いをはじめ、人々の温かさや優しさにどこか懐かしい感じを覚えた。日本人との交流が彼らにとって新鮮で、それでもって心から私たちの訪問を歓迎してくれていることは会話の端々から感じられた。西安は北京や上海と比べて、外国人人口がまだそれほど多くないことが関係しているのかもしれない。たった数日間の滞在だったが、西安を出発する頃には、初日に感じた“激変した西安”の印象は違うものになっていた。

このような体験を通して、改めて日中の草の根交流の大切さを認識した。日本と中国には、古くからの文化に根ざした共通の価値観がある一方で、政治や経済などによる現代社会における価値観は異なっていることも多い。共通点があるからこそ、相違点を見つけると新鮮に感じ、それまで自分の「当たり前」に疑問を持てるようになる。その意味で、中国は絶えず刺激を与えてくれる、かけがえのない隣国だと思った。

この訪中団がきっかけで、もっと中国のことを知りたいと思うようになった。そして、中国語の勉強を始めた。中国を知れば知るほど、日本に対しても発見がある。これからも中国

から学び、それを活かしていきたい。これが、将来の良好な日中関係を築くための原動力ともなり得ると信じて。

「友好への第一歩」
3-A　京都大学　横山すず

私が訪中を希望した一つ目の目的は中国人がどのような人なのかを現地で体感することであった。京都での生活で中国人と触れ合う機会が多く、日本人の中国人に対する印象が世代間で大きく異なることを実感し、同世代の中国人が日本に対してどのような印象を持っているのか知りたいと思ったからである。

訪中では北京と西安の二つの外国語大学を訪れ、多くの日本語専攻の学生と交流することができた。大学は敷地面積、生徒数共に規模が日本の何倍も大きく、想像を遥かに超えた多くの中国人学生が日本語を専攻していることに驚いた。日本のアニメやキャラクターをきっかけに日本語を勉強している学生が多く、日本文化が日本への理解を促進していると実感した。また一方で日本語を専攻した明確な理由がない学生にも出会った。そこでは日本への興味の度合いが様々な学生が日本語を学んでいるようであった。

日本では中国船の領海侵犯や中国人旅行者の迷惑行為、知的財産権の侵害といった、日中友好とはほど遠い報道ばかりが目に付く。それ故か日本人は中国に対する印象はネガティブである。中国国内でも少なからず対日報道はされているはずであり、日中関係における課題も認識しているはずである。日本語専攻ということに嫌悪感を示す中国人もいるかもしれない。このような情勢の中、メディアに流されず日本のアニメ文化や伝統文化に自ら目を向け、日本に関わる人生を選んでくれたのである。また現在中国の若者では 35 歳で強制リストラや 100 回の面接で合格がたった 1 回というような就活難に直面している。就職に大きな影響を与える大学の専攻に世界共通語と言われる英語ではなく日本語を選び、将来にわたって日本と関わりたいと考えている学生が多くいることに嬉しさを感じた。

日本では対日感情を持つ中国人ばかりが取り上げられるが、現地には日本と良好な関係を望む中国人が多くいた。日本では中国を過度に情報統制した国だと報じることがあるが、偏向的な報道を鵜呑みにしてしまう日本人こそが無意識に統制されてしまっているのかもしれない。中国国内ではグーグルの使用が禁止されているため中国発信のローカルなインターネット情報を日本で得ることは難しく、日本で得られる中国の情報の大部分はメディアを介している。簡単に得られる情報を安易に信用しない自分の価値観を持つことが日中友好に必要なのだと感じた。

訪中の二つ目の目的は、中国の最先端の科学技術を見学することであった。西安のシルクロード科学という開発区へ行き、金属 3D プリンタの大手企業である BLT の工場見学をさせていただいた。シルクロード科学開発区では、中国内陸部の科学技術の発展のため中国国内の先進的企業が集結し共同研究などをおこなっているそうだ。BLT 社ではカメラにセキュリティーシールを貼り、外部に最先端技術が漏洩するのを防いでいた。工場には 3D プリンタが何台もあり、機械制御下で製造が行われており従業員は十数名しか見当たらなか

った。 BLT 社は創業からまだ 10 数年しかたっていないにもかかわらず数多くの特許を取得し航空産業や宇宙産業にも関わっている。

政府が科学技術発展のために多額の資金援助をし技術革新を行い、最先端の科学技術を国内で守り工業化につなげることで、中国は科学産業における影響力を高めていったのだと実感した。日本企業は最先端技術を自国で発展させる資金と土地がなく、日本の技術が世界に流出しているように思える。日本は中国のように国内の科学産業を守るための行動を起こす必要があると感じた。

今回の訪中では素晴らしい出会いに恵まれた。全国から集まった団員は国際経験豊富な人が多く、移動中の会話は私の知見を広げ、今回が初の海外経験であった私に世界へ飛び出す勇気を与えてくれた。

また訪問した外国語大学の学生とは帰国後も頻繁に連絡を取りあい日々の生活を共有している。この交流によって中国の文化を日本でも直に感じることができている。また同世代の中国の学生と就職活動や将来の夢など共通の話題について話すことは自分自身を見つめ直すきっかけにもなっている。このようなかけがえの無い出会いをもたらしてくれた訪中団に深く感謝し、この交流を長く続けていきたいと思う。